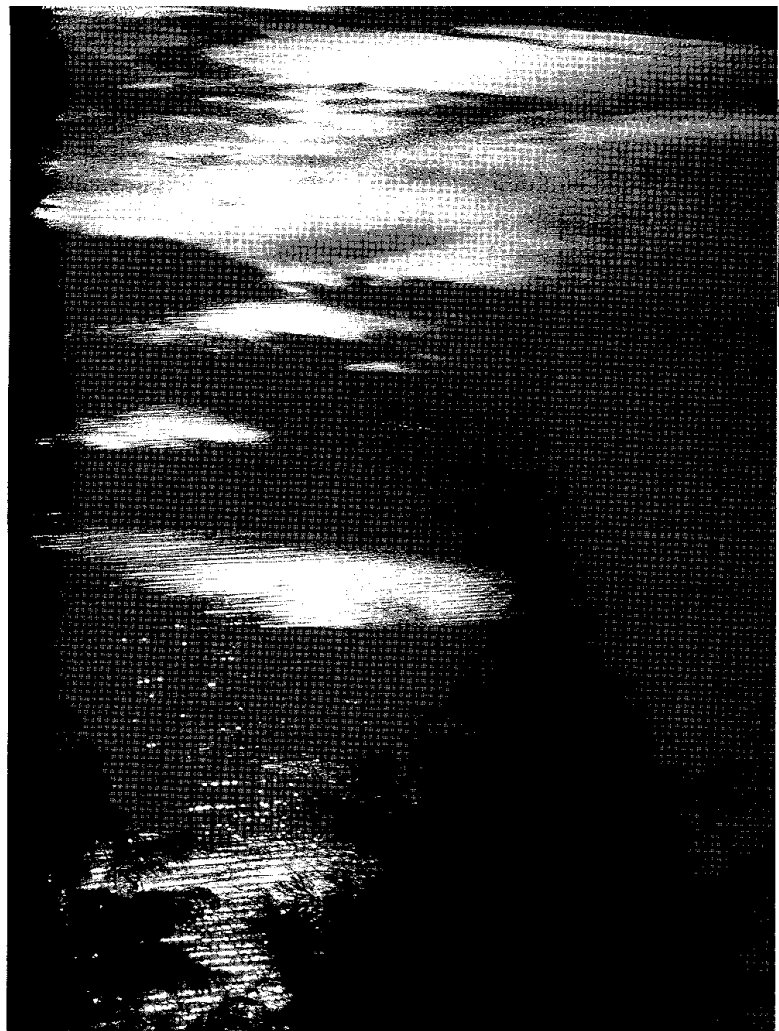


物語に見る びわ湖と人



風景を女と男にたとえるなら、近江はやっぱり女である。「おうみ」という言葉の響きには、女性のやさしさとぬくもりがある。母なる湖があるからだろう。

とりわけ湖の北は、やさしさの奥に妖しさをもはらんでいる。湖のほとりに立つとき、ある人は永遠の眠りの場を選び、ある人は湖からよみがえる。

男と女の愛と憎悪、生と死を描いた物語の舞台はびわ湖。主人公は女性。びわ湖が別れの場になり、旅立ちの場にもなる。そんな小説のいくつかを紹介しよう。

惹きこまれそうに妖しい湖です

まずは芝木好子の「群青の湖」。小さいころ使った二十四色のクレパスには、青色のところに群青色が並んでいた。青が群がるという意味だから、青よりも深くて濃く沈んだ微妙な色だ。びわ湖の色でもある。

主人公の桂瑞子は、東京生まれの東京育ち。大都会の片隅で、近江八幡の旧家の次男である大室潮と結ばれる。

「……湖面が神秘的な色をたたえて、惹きこまれそうに妖しい湖です」

「いいでしょうね、澄んだ青い湖があった、神が棲むような」

私に見えているのは湖の藍の生命

子どもができ、しかも潮の兄、玲が不治の病に侵されるという事態が重なり、二人は旧家を継ぐため、近江にやってくる。死と対峙する玲の感性は、瑞子の感性と響き合う。

「湖の色は群青ですか。雪が降りそそぐと、忽ち吸われてゆくでしょうか」

「湖は深海よりも透明で、藍が幾重にも層を成して底から色が立つ。凄艶だ。白樺が一本、人柱に立っているよ」

「その光景を見たひとは、そこへ還ろうとするのでしょうか」

「人が眠りについて、永遠に帰帰するのはそんなところだ」

玲は、やがて湖が見える家で亡くなる。瑞子は、染色に生きる道を求めるが、それは同時に夫の潮が、自分から離れていく道でもある。夫が親戚の若い娘に子どもを胎ませるのである。瑞子は、玲が語った奥びわ湖のほとりをさまよひ、自殺をはかる。

村人に助けられ、死の淵からよみがえった瑞子は、東京へ戻り、織物に生きる道を見つ

ける。織るのは、ひたすらびわ湖の風景だった。そして、大学の研究室の仲間である浜尾とともに、再び葛籠尾崎にやってくる。

「ここは研ぎ澄まされていて、惹きこまれそう。ひとりではいられないわ。……いま私に見えているのは、湖の藍の生命と、浄化の雪と、枯葉の明るい茶なの。清らかな鎮魂の布が織れたら、私も過去から解放されて自由になれそうな気がするの……」

湖と別れの時がきた。再び来ることはないかもしれない秘境をあとにするとき、振り返った瑞子の前に、湖は深く澄んで静まっていた。

みごもりの湖が今にも波立ちそう

秦恒平の「みごもりの湖」も、びわ湖を舞台に男女の愛の世界が広がる。「みごもり」とは、神隠り、水隠り、身隠り、そして妊りだと作者は言う。

五個荘の旧家に生まれた絵屋菊子は、同志社大学を卒業して実家に戻ってきた。しかし、その数日後、織山に姿を消す。妹の楨子は、理由もわからない姉の失踪に悩む。それを確かめるため、同じように同志社大学に入り、姉の生活の軌跡をたどり始める。

そんなとき、姉と深く関わった小説家幸田康之と彼の妻を知る。そして幸田の小説のなかに、姉と想定される女性直子が登場する。

「ひろいひろい、みずうみ」

小石を拾うと直子も拾った。二つのつぶては高い崖を滑り下りるように、深く澄んだ水ぎわに消えて白い影になった。もう一歩。もう一歩だけ踏みだせば二人は琵琶湖の最北端に港えた、深さ百メートルもある緑の淵に沈む。踏みだして私が覗くと直子は咄嗟に腕を掴んで引き戻した。

幸田自身である小説の「私」と直子は、直子の同級生である女性と「私」との結婚が決まったあと、二人で湖北へやってくるのだ。

直子は船をえらんだ。

「ありがとうございました」

直子はあたまを下げた。……直子とはおしまいだ、と思っていた。船は、晴れてきた湖の上をゆっくりゆっくりちいさくなくなった。直子の姿はなかった。

政府登録国際観光旅館



旅館 紅点

びわ湖を臨む全客室
宝湖の味と
尾上の湯

東浅井郡湖北町尾上
TEL. 0749-79-0315
FAX. 0749-79-1265



『群青の湖』を訪ねて

群青色のびわ湖が見える場所はどこにあるのだろう。

あのあたりだろうか
想像しながら読むのも楽しいものだ。

湖北を舞台にした小説は数多くあるが、芝木好子著『群青の湖』もそのひとつである。小説は、東京の大学の工芸研究室に勤め、染色を志している桂瑞子^{きずね}が、近江八幡の旧家の出である大室潮と恋をし、結婚、出産、離婚を経て、染色家として自立するまでを描いている。その過程を経糸とするならば、旧家のしがらみ、頑なで誇り高い姑との確執、病気の義兄との心のふれあい、夫の浮気、新しい恋愛が緯糸として織られていく。では、本の題名にもなっている、群青色のびわ湖が見える場所はどこにあるのだろう。湖北に住むものにとつて、たいへん興味深く、あのあたりだろうか想像しながら読むのも楽しいものだ。

鎮魂の旅

そこで、私のおすすする文学散歩は、瑞子が潮とともに湖北の岬を訪ねる場面である。それは、瑞子が心を通わせることのできた亡き義兄の鎮魂のための旅だった。

車は走り出して彦根へ向い、北へと進んで、古い商人の町、長浜の街道筋を通り抜けていっ

た。……やがて、彼の車は湖北の岬へ向った。人家はなくなり、車一台見えない。

「琵琶湖へ大きく突き出した岬は二つだが、岬はくねくねと曲がりながら小さな湖を抱くのだ。次の岬もそうだ。そうしてようやく西側の海津へと出てゆくまで、言葉に言い尽くせない、神秘的な湖や、自然の景観にめぐりあう」

……つづら折りの湖畔をまわり切つて、視界が変わり、広々とした湖の浦が現れたとき、その岸辺に打寄せられたように小さな集落があった。

小説を片手に、湖岸道路を通つて木之本へ、さらに塩津へと車を走らせた。大浦の集落を過ぎ、半島沿いの道を行くと、竹生島が現れ、やがて、山裾に抱かれるように家々が見えた。菅浦の集落だ。菅浦は、奥びわ湖に突き出た葛尾半島の山懐で、湾の奥まった水際に寄り集まった百戸ほどの集落である。昭和四十六年に奥びわ湖パークウェイが開通するまでは、船の便以外には道らしいものがなく、文字通り陸の孤島といわれていた。

二人は里の入り口の湖に面した須賀神社へと歩を進める。

うっそうとした木立の山を背に、奥深く参道が伸びている。

私が訪れたときも、あたりは森閑としていた。長い参道をたどると、石段に突き当たる。見上げると、古びた神楽舞台が見え、その後ろに社がある。石段の脇には「土足禁止」の立て札が立つ。小説の中では、二人は靴のまま行くが、私は神聖な場所と思い、靴を脱いで、足裏にひんやりとした石の冷たさを感じながら、石段を上った。

謎の湖

車は集落をあとにして、岬の先へと進んでゆくと、竹生島が見え隠れする。狭い木立の道へ入つてゆき、曲ると、とつぜん視野が広げ、瑞子は声をあげた。小さな岬が円を描いて球を抱くように湖を包んでいた。……奥琵琶湖の秘した湖は、一枚の鏡のように冷たく澄んでいる。紺青というには青く、瑠璃色というには濃く冴えて、群青とよぶ

のだろうか。太陽の反射が湖面を走る一瞬に、青が彩りを変え、のを彼女は見た。……

群青の湖とは、どこなのか。再び車を走らせた。菅浦の集落で道は行き止まりになっており、戻つて展望台へ向かった。急なカーブの坂道を上つて行つたとき、ここぞと思われる場所が……。ちょうど菅浦の集落の真上にあたり、湖を見下ろしたとき、入り江が湖をまるく囲み、岬先端の向こうに竹生島が見え、右端は大浦。この景色を芝木さんは見たにちがいないと、私なりに納得した。美しい景色を目の裏に焼き付けて帰途についた。

狐狸庵氏も感動

ところで、『群青の湖』については、狐狸庵氏こと遠藤周作さんも書かれているので、紹介したい。「素晴らしい風景で忘れがたい場所を先輩の小説家、芝木好子さんから知った。……その小説を読んだ、女主人公が死の場所として選んだその地点を私は訪れたい。湖のあちこちを探しまわり、むなしく東京へ戻ってきた。あるパーティで芝木さんにたずねる

と、彼女は微笑しながら曖昧な返事しかくたさなかった。彼女もやはり、そこを多くの人に知られなくなつたのであろう。」

(一九九二年九月二十七日付 『万華鏡』忘れがたい風景より)

その後、知人に『群青の湖』を送つてその場所を探してもらつた遠藤氏は、見つかるやすぐに訪れたという。

「やがて、その湖の奥にたどりついた。二月の午後、入江のようなその地点の周りの山々は白雪に覆われ、冬の弱い陽をあげた湖面は静寂で寂寥としていた。まるでスウェーデンかノルウェーのフィヨルドに來ているような思いだった。神秘的で人影のまったくないこの冬の風景は以後、私が年に一度はひそかに訪れる場所となつていく。その地点の名は明かさない。……以上、私のヒントで探してください。」

芝木好子氏も遠藤周作氏もすでに故人となられて、もはや確かめようもないが、私は自分が訪ねた場所がその場所と思うことにした。みなさんもぜひ、小説を読んで探してみてください。(うらら)